『グループ中国だい好き』会報72号

2010年10月9日　72号

「グループ中国だい好き」会報
『中国だい好き』
我们很喜欢中国!
Women hen xihuan zhongguo!

●代 表　内田知行　042-464-8858
〒203-0034 東久留米市弥生2-7-13
●編集・発行グループ
内田知行　川村陽子
千田　茂　富岡幸雄
●http://kuru2.genki.365.net/(くるくる)
●http://zuixihuan.exblog.jp/(ブログ)

蘭州、敦煌と西安の旅（8日間）

—ミニ日記及び感想—

沖満　信夫

過去、出張では何回か中国を訪れたが、今回のように観光が目的で中国を旅行したのは、これが初めてである。したがって大いなる期待はあったが…。

9月3日（1日目）

北京への出発便が予定より1時間40分遅れ、いささかうんざり。北京に着いて驚いたのは、空港のべらぼうな大きさ。6年前は異常を感じなかった。2年前のオリンピックのために新築したらしい。大きければ良いのではなく、機能性をもたせてもらいたい。ただ、だだっぴろいのは……？

北京→蘭州への出発も40分遅れ、蘭州着が23:10. 現地ガイド趙さんの出迎えを受け、バスで錦江陽光酒店に着いたのは24:20頃、したがって就寝したのは4日の朝方になる。

9月4日（2日目）

蘭州は空港から72km離れており（バスで1時間と少し）、人口300万人だが出稼ぎを含めると400万人になるという。

蘭州は北京、上海、広州、ウルムチ（烏魯木斉）etc へ約2,000kmで中国の中心部分にあり、各地域に物産を輸送するに適所であり、商業、経済の中心をなしているとガイドは強調していた。

- 1 -

河西回廊を旅して

木山　淳子

アジアの地図を開くとちょうどや中。朝ごはのあたりに蘭州がある。北西に、とぎれとぎれの万里の長城の記号を追っていくと、武威、張掖、高台関、敦煌に至る。

この間全長約1,200キロの絲路・道地が河西回廊(黄河の西にある回廊)。その中に、出張地点、パで以北の砂漠地帯、オアシス地帯を含んでいる。

南の祁連山脈と北の馬鞍山、合整山、龍首山の間山脈にはさまれ、幅平均100キロにすぎないが、地勢は平らで、中国内地と西北辺境地区をつなぐ交通の要路、かつてのシルクロードである。

この全長1,200キロの河西回廊を「中国だい好き」の8人は小型バスで旅した。

蘭州は日本語時代の出土品も多いので、甘粛省博物館では見事な彩陶の土器がたくさん展列してあった。

木製ちその付属品もたくさん見た。

これが木製ちす。

学芸員のおじさんに「這是什么？（これはなんです か？）」と聞く。が、分からない。もう3回「這是什么？」「…（沈黙）…」？、？、？明白了！（わかったかす よかった！ よかった！）

何を質問したのだったか、納得したやつは思い出せ ないが、学芸員のおじさんの顔ははっきり覚えている。

北京オリンピックのシンボルマークになった「馬踏飛燕」を見て、そのあと、「馬踏飛燕」を出土した「雷台の東漢墓」を見に武威へ、バスで約2時。

雷台の東漢墓はまるで公園のようだ。きれいに整備されていた。周りの住い家も平らにして、芝生を植えたのだろうか。広々している。夏の夕暮れのひとり時、市民の憩いの場所になっていた。後々の真上の空では小鳥もの

飛行機が盛況を繰り返しやっている。近くに軍事基地があるのだそうだ。

武威には大乗子廟の文殊もある。ここで学んで科挙の試験に合格し、功なり名 り遂げた人の石碑が廟道作に建ててあった。私でも知っている著述が刻まれ ていたが、この人たちは当時は著述と呼ばれたようで ない。大きな仕事をし、そ のうえで徳業をつあったのだと思わて居る。

「民族團結」の碑　大理の郊外にて撮影のもの

張掖、張白・酒泉の地名がわっきとした由来（張が地区に対して「国の帯状 （地）を張る」が ある。

初期人の頃の先生が「張掖の大乗寺はもう一度行ってみたい」とおっしゃった ので、それで、この旅行に参加しないと思うようになったのだ。そのつもりで 本ちど訪ねていると、前集の時にこの地名を見つけたりして、当時はどんなこと だったんだろう？ 今はテ とこに来るのが楽しみだった。

来たよ、見た！ 夜の高いところに風が吹いていた。

町を出るとすぐにパが始まる。現在使われているもっとも風地がずっとずっ と続く。魏晋時代の遺跡の古代風景もある。発掘されている1つを見学した。中国 の芝生はまで敷かにあるというが、ここの絲道沿も地下10mにあった。

最後の幅河広がって、以前になるとガイドがここはいつも風が強いところです ！と言う。風力発電の大きなプロペラが見え始めた。うわあ、見晴らすが、は

るか先まで風力発電の柱がずっと続いている。何で？ 何で風ですかやな。

絲道山脈に雪が見えて地勢が厳しくなる辺りに嘉峪関の街。そこからも見晴は続いて、戦壁長城の山の てっぺんで天国の長城に終わる。

ここが万里の長城の西の果てで、この山の長城の標 高は45度ぐらい急斜面。この光景を「恐に壁をかけ たようだ」と味えて命名したのは、どんな人だろうか。 さすが中国は世界の国だ！ を感のわけにおかもんして通 る。

あいにくその前に雨のかの土煙って見えなかったのが一。 中国の広さと歴史と、今現在の勢に驚いた旅でした。

南京の日中関係史史跡を見学しました

内田　知行

2010年8月1日から29日まで、蘭州先の大学の学生たちの中国現地研修の引率者として上海に参ました。19日から25日のあいだには、蘭州・南京への小旅行をしました。

蘭州では、中国を代表する名刺・黄山今や、真心やから15度に傾いた「蘭州の時間」で有名な遊覧山を参観しました。蘭州のチューブでは、同級に乗って観光に興じました。チューブを度るそと風を受けながら、和服さんが乗ってくれる蘭州の「民度」を感じ入ました。

南京では、中華民国時代の史跡、総統府と孫文の山陵（中山陵）を見学しました。南京は戦争中の日本軍による虐殺の残虐現場っていう都市でもあります。

南京では、14日の夜、南京大学歴史学院の曹大民先生が会いにきてくれました。十数年来の旧友です。

曹先生は近代日中関係史の専門家で、近年「近代日本在華教育制度」というラ イブ ワークを上梓されました。

15日の午前中は、曹先生の案内で南京市内 に残る中国国史の遺跡を巡り、その後「南京 大虐殺記念館」を見学しました。

朝8時、ホテル出発。南京大学キャンパスの 近くでバスを下車して、日本軍占領時代の日本 大使館（今はまったく違う建物になっている）と隣の日本語事館の建物（「三菱科技」という看板を掲げた会社の事務所になっている）を見ました。

南京に1940年3月に汪精衛「国民政府」が設置されると、実質は日本軍占領下の「傀儡権」でしたが、名義上は独立国として通されました。そこで、南京に大使館が発足しました。他方で、日政権の在日大使館も1941年1月に東京に設置されました。

もっとも南京の日本語事館設立は早くて、1906年6月に設立されました。領事 館保護国を担当したので、大使館と対等に日本軍占領時代も併置されたのです。

日本政府は中華民国にたいする外交上の呼称として「支那共和国」を使用して いたが、汪政権の時代になって、初めて「中華民国」と呼称する政策を採りました。中国人が「支那」を侮辱と「嫌ったのはいつ」までもありません。日本語 事館を支学したあと、南京大学の門からキャンパスに入りました。

このキャンパスは1937年11月に南京虐殺事件が発生したときに「国際安全 区」に指定され、難民は人が中国人難民を保護救済した場所です。

南京大学は民国期にはアメリカのクリスチャン系の大学、金陵大学でした。い まではキャンパスの中には当時などその時代の建物物が残されています。

当時の校長室が建ったと聞いたが、いまでは南京大学校長室の建物として 使われています。その近くには当時のチャペルもあり、今では映画上映や集会などに利用されています。

キャンパス内を少し歩いて、抗南京神社跡を見学しました。南京神社は南京大 学の体育館の隣にあります。といっても現在残っているのは、神社の一番奥に設置する拝殿の部分だけです。

曹先生の調査によると、南京神社は日本軍占領時代の1939年ごろに建立され ました。明治神社を模倣して建てられました。

日本軍占領時代の中国には多くの神社が建 立されましたが、南京神社は中国大陸にかつて も現存する数少ない神社だそうです。大きな 神社の為田社大学の体育館建物物に取り込ま れてしまいました。拝殿は現物のある建物だ ったので、転用可能さゆろうとて残されたの だそうです。でも、戦時中神社の拝殿だったことを知る人はほとんどいないそうです。

なお、華中占領地の戦闘で戦死した日本兵は南京の近くで火葬され、遺骨は一 時的に南京神社に保管されました。遺骨は一定の期間ごとに上海港経由で日本に 送られました。そのさいに遺骨の一部は分骨されて南京神社にも置かれたそうです。日本に移送された後は、陸軍墓地や海軍墓地、さらに出身地の墓地に埋葬さ れました。神社を廃止し管理する団体としても消滅、表面解体公収されました（1939年）が、これが戦後の日本遺族会です。

今回は見学の時間がありませんでしたが、曹先生によれば、有内の梅花山には 日本人墓地があります。これは、20世紀初頭に南京にやってきてここで死 去した日本人を葬った墓地で、戦争とは直接関係のない死者の墓地です。ちなみに、日中戦争直前の1937年頃の「日本帝国臣民」居留者の統計は下記のとおりです（曹先生の示唆）。

区分	南京市	（参考）	上海市
日本人	1 6 3人		2 3 7 7 2人
朝鮮人	2 4 3		2 2 2 7
台湾人	3 8		6 7 8
計	4 4 4人		2 6 6 7 7人

南京に「日本人」が居住したのは、古都以降だったことがおかります。

「史跡巡り」を終えたあと、バスで「南京大虐殺記念館」に向かいました。この記念館は、「委託教育基地」の一つということで、数年前から見学無料になっています。

入館すると、新西のオープン・スペースに犠牲者を追悼する彫像作品が1つ ち展示されています。大きな壁面に「犠牲者 30万人」という数字が中国語、日本語、英語、ハングル、フランス語、ロシア語、その他多くの言語で表記されてい

イスラム人人類の表現で数量子のネットに挑戦した。東海林さんは自分のいち 頃を断固語らず、イスラムの山林さんはほとほと根負けし、東海林さんの勝利に終わった。さすがに中国語のエキスパートとその根性に脱毛、いや脱帽したものである。

9月10日（9日目）

西安空港より北京へ、北京空港より羽田への帰路について。

帰りも約1時間ほど出発が遅れての羽田着、帰りの電車がないのでは――と、 同あわてたものであった。

とにかく、今回はすべてが「たかい」を痛感した旅であった。また、旅での楽 しみの一つは食文化を出来るだけ多く経験することである。

中国での旅先滞在中、当然のことながら、昼、晩すべて中国（中華）料理で あるがとりわけ昼食、晩食の料理選択には内田先生の知見に負うところが多かった。いつの日にか自分も他のために料理を選定できる能力を働いたいものである。

旨い料理にアルコール は欠かせない。幸いにして今回の旅の同行者で安数定は自分を含め3人だけで東海林さんとは地域柄には自制、老酒等で料理の味覚を 仰ぎ、楽しんだものである。

蘭州市場前　（内田撮）　　中国人ガイドの趙さん（内田撮）

最後に9月3日の夜から9月8日の帰まで現地で対応頂いたガイドの趙 さんにお礼を申べたい。趙さんは大学で日本語を専攻しており、その専門は勿論 な日本語であった。彼は真摯な態度でガイドに徹し、日本人的感覚で良く接し てくれた。人柄も親切らしい。良い観光者になるであろうと感じた。

旅の同行にあたり、内田先生をはじめ、諸兄姉にたいへんお世話になったこと に感謝しつつ筆をおきます。